

削蹄時の最小限のストレスと効率の両立を目指して (株)チーム那須 齋藤友佑

私達は栃木県那須塩原市を、拠点にしている削蹄会社です。今回は、私達チーム那須が削蹄師として牛の誘導に配慮した削蹄場のデザインを考えるにあたり意識している事、気が付いた事を改善前後を比較、発表する。

例1) 図1、改善前

牛舎の飼槽側に油圧杵を設置していた時のもの。この杵の位置だと赤の➡から入ってきた牛達が緑の➡方向に戻ってしまい削蹄杵後方に連れてくるのが非常に困難であった。①のサークルに誘導する際も最低2人は必要だったので効率が良いとは言えなかった。飼槽を半分使えない事も良くなかった。

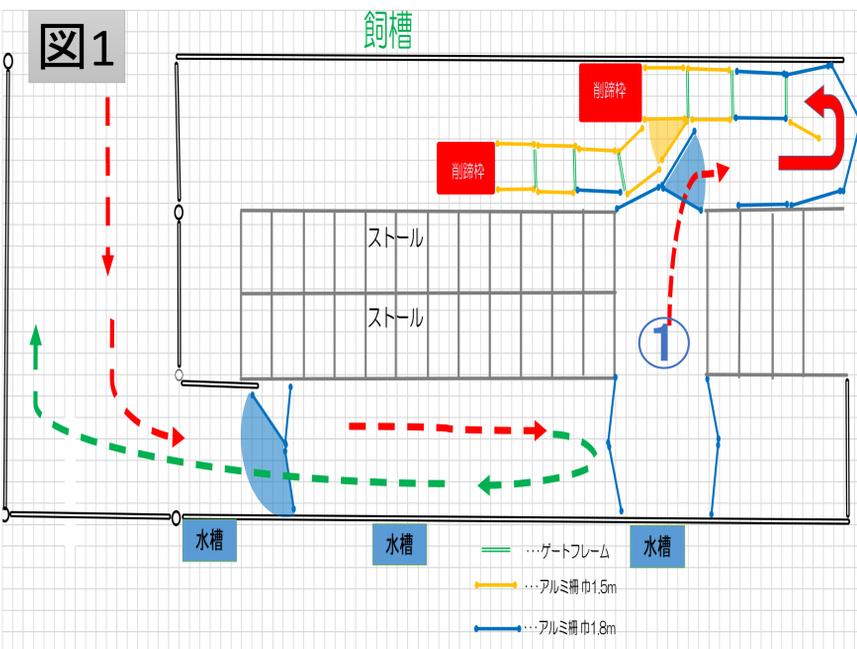
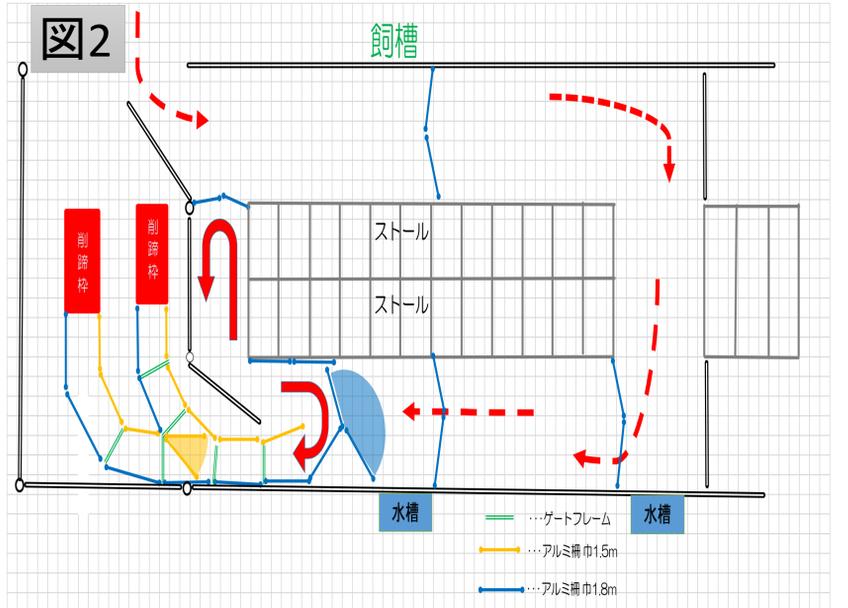


図2、改善後

問題点に配慮したもっと良い設置場所がないのか考え変更した。

この位置だと連れて来た牛達は赤の➡方向へ勝手に歩いてサークルまで入っていき、基本的には1人の牛追いで作業が間に合うようになった。削蹄を待っている牛達はエサも食べられて水も飲める状態になり緊張感も少ないように思えた。



例2) 図3、改善前

例2牧場は、ストールが2列の120頭牛舎。以前はパーラーの待機場前に杵を設置していた。①に牛を入れると➡方向に振り返って仕切り柵、弱い牛に強い圧力がかかっていた。この牧場も牛追いが最低2人は必要であり、また、ベットの構造上緑の➡方向に牛が潜り抜け、削蹄前と削蹄後が混ざる事もあった。牛は逃げるほどに神経質になり、余計に誘導が困難になった。

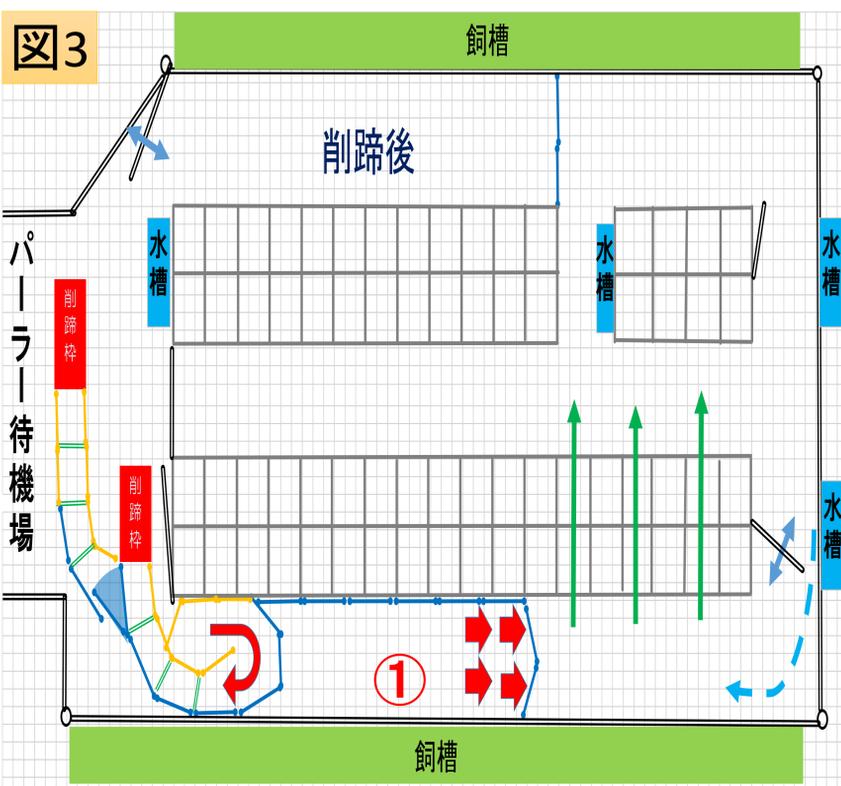
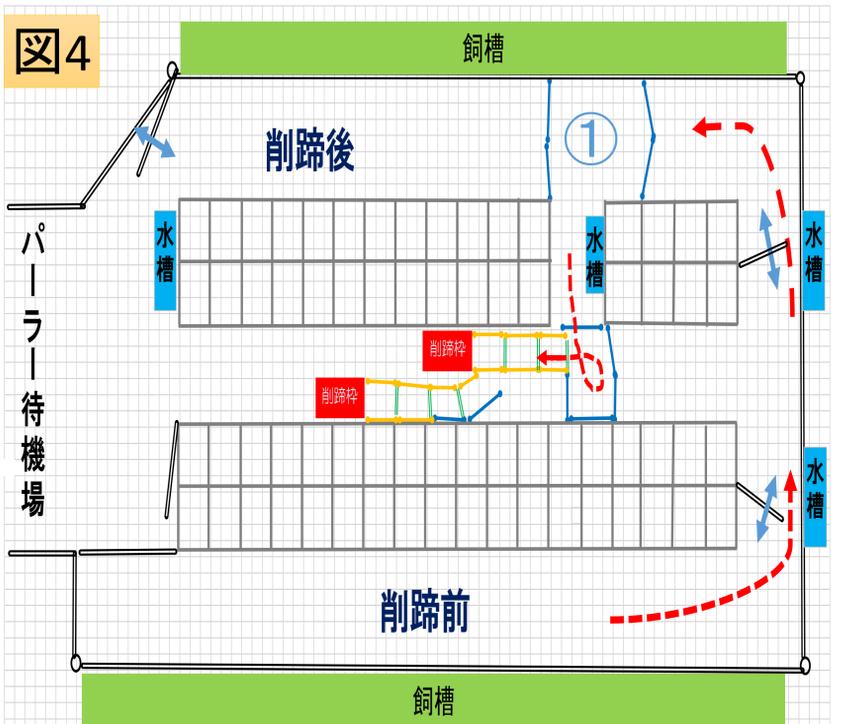


図4、改善後

この牧場の牛が神経質なのは、牛が原因なのか？杵の位置や一度に連れてくる頭数を減らせないのか？を考察し実行した。

すると、牛追いは1人で間に合うようになり、混ざることなくスムーズに仕事が出来た。杵の後ろで待機している牛も①で待機している牛も大人しく待機してい杵への入りもスムーズになった。水槽も飼槽もバランス良く使えていたので全体的に良い改善が出来たと思う。



まとめ

今回の発表は、ほんの一部ですが日々牛のストレスを極力減らせるように考えながら削蹄をしています。削蹄のクオリティーを求めるのは当たり前ですが、牛にとって非日常の削蹄をいかにスムーズに終わらせるか、乳量が減らないように考え続けるか、それも削蹄師の面白いところです。牛が慌てることなくスムーズに動いてくれるということは、牛の習性を上手く利用し最小限のストレスに抑えられてると考えられます。その日の天気や杵周辺の明るさや、杵と杵の距離感、角度によっても杵への入りが変わります。今後も牛を観察し続け、より良い削蹄ができるように考え続けます。